寄書

自分が水彩畫の初め

信州上田　内堀良民

恰度去年の正月の事、年初の客の往來も少くなく吹雪のはげしい日であつた、餘りに無聊であつたので直ぐ近所の小學校の先生の所へ遊びに行つた所が例の通亦畫を書いて居られる、中學世界の口繪だ、よく飽きないものだと思うて見て居ると二三十分で仕上つた樣だ、二間許彼方の壁へ張つて頻りに目を細くして眺めて居られる、上手だらうと云はれる成程目を細くして見ると美しく見えるから下手ではないと答へた、「君は幾度云うても書いて見せんれ」「馬鹿らしくてさ」「面白いよ書いて見給へ」「なに畫家になるじやなし氣狂じみた」と云うて居ると其所へ矢張畫の好きな先生が來られた、さあ馬鹿にする、冷かす、美術的思想の無いものは哀むべしだとか何んだとか大變な熱を吐く、よろしい！驚く樣な物を書いて見せよう、强情にも、と決心して早速家へ歸つて來て三宅先生の富士の畫を、先づ中風病の樣な線で輪廓を取り、色色と色を捏れて彩つて見た、元來畫は下手で好まぬ方であるから上手に書ける譯がない、それでも自身自慢で直ぐ持つて行つて見せると賞める所か大笑い、此野郎と思つたが今度こそはと思ひ返して翌日は日曜日なので朝から書き初めた、仲々うまくゆかぬ、其中に悔やしくて涙が出て來る、漸くの事一日中書いて一枚仕上げて見ると前のより幾分よい、さあうれしい、止め樣もなくうれしい、持つて行つて見せると前より餘程よいと云はれる猶々うれしい、面白い、

扨たまらん毎日毎日學校から歸へると畫筆を持つたぎり何もしない、

斯んな事が二ヶ月許學期試驗となり其も終へて試驗休も畫筆と畫用紙で暮し漸々三學年になつたが如何程忙しくも二日と書かないでは居られなかつた、其中に前の先生が春鳥會發行の**みづゑ**を示された、自分は驚きもし、勵されもした、

そうなると畫と名づける者は何んでも見落す譯に行かぬ、雜誌の**カット**であらうが、錦繪であらうが、新聞の挿繪であらうが、手あたり次第だ、それかあらぬか第一學期には今迄善くても六十點位であつたのが八十五點となつた、其時自分は天にも昇る心地がした、

秋の十月の末淺間へ登つた時、朝霧が霽れて鬼躑躅や櫨の眞紅なのを綠樹の間に眺め、歸途桔梗色なる彼方の山から、薄紫したる林梢に盆の樣な黃色い月を眺めた時、云ひ知らぬ畫興に胸を踊らし心の美しうなるを覺へた事があつたが是も皆繪の賜かと思うと今更感謝せずには居られない、終

豆相の一日

夏廼家主人

此陽氣を、紅塵の裡に燻ぼりて、すごすも本意ならずと、玆に伊豆めぐりを思ひ立つたのは、都は花に浮かゝる四月の初めである。

國府津行の二番列車は午前十時と聞けば、支度も、そこ〳〵に繪道具引擔ぎて宿を出づ、折しも降り續きし前日の雨にて、途上木々の若芽は一段に生氣を添へ、江戸川の櫻花は、はや七分通りも綻びけり、名殘惜

しくもそれを後に見て電車に搖られつゝ新橋停車場に着けば、發車迄には、まだ二十分許りの間あり。

やがて汽車は緩々と進行をはじめ、芝浦あたり馳せる時、今朝はさりとも覺えざりしが、又もや雨雲たちこめて、品川の空も仄暗く、灰色の眞帆片帆遠近に漂ふを見るのみ、富士の高嶺も今はその項だに見せず、茅崎大磯あたりには未だ人多からねばいとものさびし。

かくして國府津につけるは、十二時を過ぐる四十分、直ぐに小田原行の電車に乘る。唯一輛の三等車に闇雲押詰められて身動きもならず、ゆられ〳〵て行くほどに、酒匂川もいつか横切り、右手に足柄龍神岳など眺めて進む、酒匂の街を通るころ"氏神の祭禮とや、村人ども旭に櫻の山車を曳きつゝ、傍へには白きものしたゝかに塗りて、忠臣藏の扮裝嚴しく、それ〴〵に槍小太刀掻込みたる若者附添ひて練り來るに逢ふ、娘内儀も今日を晴と着飾りて、もの〳〵しく電車を打戍るも可笑し。

二時少しすぐるころ、小田原に着きて三時十三分發の熱海行輕便汽車に乘りて南す、されど汽車とは、ほんの名ばかり、青梅線のそれよりも狹く小さくして、之もたゞの一輛、尤も一二等車は別なれど案外に客多ければ二等三等もあらばこそ、吾勝ちに突き除け押し退け辛うじて坐を占む、あはれ議員の歳費請取るも斯くやなど要らぬことゞも思ひ出でつ、やがて汽車は醉泥のぐらつく樣に、或はだしぬけに引手操る樣に、柄にもなき大聲の汽笛鳴らしつゝ進むほどに、田舍の車掌の呑氣さ加減、車が停まりても絶えて其地名を呼ばれば、那邊が其處やら掻暮れ解らず、車内にては知らぬ同士の押問答、中には足許から鳥のたつ樣に、物忘れして飛び下るなどの滑稽もあり。

伊豆の海岸は、なか〳〵に嶮阻と聞きけるが、汽車の沿道は分けて甚しく、百仞の懸崖を脚下に瞰て、生死一瞬の膽を冷す場所も尠からず、乘合の一紳士、傍への人に顚落の虞なきや、など問へば其人答へて、されば此汽車の脫線は屢々聞きつるが、此間端なくも一輛顚覆して、多くの怪我人をつくれり。その中に、さるやむごとなき姫君の、いたく額を傷りて、今尙眞鶴病院に治療中なるが、洵にいたはしき限なり、などまのあたり聞かされては、道に好き心地もせず。

さるほどに坂を登り、山を超へ、畑を横切り、村を過ぎづゝ、左手に相模灣の窮りなき海原を眺め、近く渚に跳る白浪を瞰下し、蜿り〳〵て行く中に、汽罐車に故障を生じたりとて、江の浦停車場に待つこと半時間ばかり、横合より、口善惡なき頓智者、是ては輕便にあらずして不便鐵道なり、など云へるも理ぞかし、それより程なくして眞鶴停車場に着す、雲時茶亭に憩ひ、里路傳ひに、とある小丘の裾を繞りて、黃昏眞鶴の街に出づ、此處にて銚子あたりの漁師町にも似たる石段幾つとなく下り、平井屋といふに靴の紐を解きぬ、案内されたるは、床の間もなき汚らしい四疊半、段通のしかれたるはよけれど、いたくもの古りて所々に拳ほどの穴さへあり、さは謂へ何時も財布の底輕き素寒貧には、仰山な待遇をうけるよりも、却てこの方が都合よく、贅澤をぬかすでもあるまいと、下婢のするがま

ゝに、そは兎もあれ、襖隔てし四五人の相客、女二人ばかり連れたれば、夜更くる迄高聲に噺合ひ、かしましさいふ許りなし、其又隣には行商人とも覺ゆるが、圍碁を賭けて、金錢の音をチヤリ〳〵とさするに、はや胸惡く、中々に寢心地安からざりし。

畫題數種

和歌山　晩雨

▽トンネルの中は、吾人に一つの畫題を、供して居る。此の世から不意に、地獄へでも落ちた樣な、感の起る刹那、パッと光るマツチ、阿彌陀樣にでも會ふた樣に「安心」てふ表情をした、優美な圓滿な曲線を有する女の顏や、剛、健、壯、强などを表はす凹凸多き男の顏面が、パッと息ふ瞬間、思はぬ光明に會うて、この一點の救主に向つて集中する、其時各自輪廓だけが赤く、パッキリと、暗の中に見える。此瞬間には、汽車中にある感は全く去ッて、ただ何とも知れぬ神秘なインスピレーションに打たれるものである。

▽十一月頃から三月頃へかけて、海岸の空氣は何となしに重くなる。而も午前中は一層である。此の頃、海岸では船の底裏を燒く爲半ば傾いた漁船の下から、篝火がポッポッと燃えだして、そんなのが向を變へ、位置を變へて、三ッ四ッ、バツクには重き空氣に閉ぢられた松林(或は大海原)を置いた景色、サシコを着た漁夫が其點景となつて居る。之一の畫題とすべきものである。

▽關西の田舍には、大抵何處にでもある景色だが。スヽキといふ物は、余程畫趣のあるものだ。一つの村があれば、大抵は小川がある其兩側の堤に沿ふて、櫟が高く低く連つてある、其落葉した櫟に、秋から初冬へかけて、順樸なる農夫によつて作られるのである。其冬景色(廣くとれば田舍特有の茅屋が、遠近に畫面へ浮ぶ)そは確に一の畫である。

△蔦、之れも畫趣あるもの、古寺の蔦、老樹の蔦、古塔に對する蔦は、總べて畫味ある配合である。ワシントンのスケツチブツクにI saw the moudering ruin of an abbey ovirrun with ivy."とある。日本の廢寺は或は、色彩に乏しいかも知れぬ、併し其所に又雅味もあれば、俳味もある。而も其破れた壁に、褪色した朱塗の柱に、骨の碎けた狐格子にからみついて居るに至つては、即ち畫である。此の女性的の優しい植物が、何百歲にもなる老杉の、折れた枝を、からくも支へて居るのは、實に詩である、畫である。

▽去年夏、高野山下に一鑛山を訪ふた時。坑内に案内せられて、自分は其處にも一つの畫題に觸れた。娑婆から隔絶した別世界の樣な、暗黑界で働いて居る坑夫、淡赤カンテラに照された其顏(終日否一月も一年も、太陽に照された事のない青白い)、其手に握つた金槌、腰に佩いた金棒、異樣な形に掘り碎かれた周圍の鑛石、滴り落つる水、之等を綜合すれば即ち畫である。其顏面の表情と周圍の光景は、人間社會の中にも、こんな生活、坑夫生活といふ一種の浮世の日を浴びぬ生活があるといふ事を、表はす事が出來るだろう。

▽自分は大和の十津川で數ケ月を暮した事がある。あの地方の人は、未だ昔の武士を忍ばれる面影がある。其人達が、異樣な袴